(Barhat Isardās, 1538-1618) のバクティ詩がヒンドゥーの神々と並んでフセインをも称えたように、フセインの殉教伝説は北インドでひろく知られ信仰の対象となっていたと思われる。十九世紀に頂点に達したウルドゥー詩の形式マルシアはフセイン伝説(カルバラの戦い)の描写に特化した文学ジャンルだが、これが当時の北インドではシーア派ムスリムに限らず広く行われたジャンルだったことも想起されるべきだろう。

まとめると、ゴーカーは従来の学術研究では、十九世紀以降に整ったヒンドゥー教のパンテオンに入らない「ローカル」で「小さな」神とされてきた。しかし右のようなその成立史を概観すると、ゴーカー信仰は「非体系的でシンクレティックな民間信仰」というよりはむしろ、北インドの特定の時代とパラダイムを体現する信仰と考えた方がよさそうである。ただ、ゴーカー信仰は中世から近世の長期間にわたって醸成され、地理的にも非常な広範囲をカバーしているため、その現状は複雑に複層化している。これが、そのまとまった研究がこれまで行われてこなかった原因と思われる。

諸宗教間対話は進んでいるか

—— 教会の保守化傾向を考える ——

高橋 勝幸

今年、第二ヴァチカン公会議開催から五〇年の節目を迎える。これを機会に「開かれた教会」として進められてきた「宗教科間対話」の進捗状況を再検討してみた。

キリシタン史における日本巡察師ヴァリニャーノの「適応主

義布教方針」が、日本や中国の布教に大きな成果をあげていたことに着目し、その靈性が三五〇年の時を経て第二ヴァチカン公会議の『キリスト教以外の諸宗教に対する態度についての宣言』において結実した。この精神によって神学者カール・ラーナーが指導的役割を果し「開かれた教会」は従来の「教会の外に救いはない」としてきた態度から一八〇度の転換となった。多くの人に希望を与え、諸宗教との対話、相互交流等によって明るい展望を持てるようになった。しかし、五〇年経っても期待した成果は得られず、グローバル化・世俗化の流れは止められず、教義や儀式を重んじる既成宗教離れは加速し、若者の教会離れは顕著になってきた。ニューエイジ等に代表されるように簡略化された新宗教が流行るようになってきた。現状に失望し、宗教の厳格さを求める揺り戻しから再び保守化傾向が強まってきた。

諸宗教も同じ悩みを持っていると思うが、教会を例に取ると危機感から保守的にトリエント公会議以来の引き締めを計った厳しい規則を当てはめて原理主義的な旧習を懐かしむ勢力が盛り返してきているようである。保守派は既に公会議直後から『教会法典』の改正等で教導職の「不謬性」等の地歩を着実に固めていた。従って「キリスト教的自由」は位階性の「聖なる源泉」「聖なる支配」の中で、この「聖なる支配」をキリスト教的な真の自由と理解し、受け入れることになる。反抗する自由は認められていないことになる。「キリスト教的自由」は従順の中でのみ満たされるといふもので、教導職の絶対的な権力の行使に従わなければならないことに変りはなくなつた。

特に顕著なものは、インド人イエズス会士アントニー・デ・メロ神父の「出版停止令」、ベネディクト会士ヴィリギス・イーガー神父への（禅の）「活動停止令」であろう。

東洋的な瞑想の世界、仏教的なものを排除するならば、宗教間対話にも暗雲が立ち籠めてくる。中世のキリスト教的神秘主義者エックハルトが異端審問にかけられた時代が思い出される。新教皇になってからの問題発言は目立って多いが、二〇〇七年の自発教令「スンモールム・ポンティフィクム」で禁止されていたラテン語ミサを認めた。さらに翌年にはピオ十世会の司教四名の破門罰を撤回する。この司教の中にホロコーストの毒ガス使用を否定したりチャード・ウィリアムソンが含まれていて批判も起っているが、保守化色は濃厚になってきた。多くの批判があっても、既に地歩を固めていた「教会法典」から自発教令の形で教皇権の不謬性が唱えられ、意義を唱えることさえ封じられている。

宗教間対話の進捗状況を知ろうとして、返って保守化色で逆回転していることに驚かされた。しかし、この傾向を放置してはならず、東西を超えた新たな真理の捉え直しが必要となってくる。これまでの主知主義、合理主義的な欧米思想の二元対立のままではキリスト教の真実も理解されないように思える。守旧的な保守化傾向も同じ過ちを繰り返し、結論が得られなくなっているのではないか。東洋的と言われながら、東西を超えた「行」の方法から真理の通底が見えてくるように思う。西田・西谷に代表される京都学派の哲学が見直されていることが今後大きな支えとなるし、学ぶべきことが多いと思う。

第五部会

親鸞における聖徳太子像について

内記 洸

現在の浄土真宗各派を中心として、親鸞が聖徳太子に強い信仰を抱いていたということはひとつの常識になっているが、その一方で、近年、親鸞の太子関連の著作をめぐる真偽問題を中心に、親鸞の抱いた太子像について疑いが唱えられるようになってきた。実際のところ、太子に関する親鸞自身による言及が量・質共に非常に頼りないものである一方で、親鸞やその周辺が遺した記述から太子の痕跡を完全に消し去ることもまた困難であり、親鸞にとって太子とはどのような存在であったのかという問題は極めて曖昧な状態に止まっている。しかしこの「曖昧さ」ということ自体が、親鸞の抱えた課題をその「語り」の発出点から考えていくうえで、ひとつの重要な意味をもっている。普通、一つの物事は様々な角度から様々な切り口のもとで問題にされ得るが、ここでの太子像をめぐる紛糾はこの複数の視点の混乱から生じていると考えることができる。歴史的・文献学的な観点からの探究と信仰の伝承の問題の探求とは、そもそも親鸞の「何」を追求しようとしているのかという関心の所在に従って、それらが語り得る範囲・領域というものがおのずから違ってくる。この意味で、同じ「太子像」を問題にするにしても、親鸞が表現しようとしたことは何なのかという問いを抱えておくことは重要な意味をもつ。